

英語の基礎を作った人々
— 古英語から初期近代英語まで —

小池 一夫

Key People in the Establishment of English
from Old English to Early Modern English

KOIKE Kazuo

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』第7号 2016年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

Studies in Language and Culture, The Seventh Issue, March 2016

Keywords: Old English(OE), Middle English(ME), Early Modern English(EME), History

Abstract

English has a history of more than fifteen hundred years and has developed in various ways due to external and internal factors in its history. Many people have been involved in its development throughout its history, and the features of English today are a result of the efforts of the English-speaking people. Language is inextricably linked to the society it is rooted in, and when the state of society undergoes major changes, the language used tends to change to adapt to the new situation. Literacy and language are linked closely to each other and many educated figures have tried to enlighten the unschooled.

This paper focuses on the period stretching from the Old English period to the early Modern English, and its purpose is to explain how the English have played a key role in making the English language effectively. Furthermore, how these notable people affected the history, the culture and society of England, and the history of the English language are discussed.

0. はじめに

言語には、絶えず変化をし続けるという宿命的な特徴が備わっている。およそ1500年の歴史を持つ英語も、例にもれず変化を繰り返してきた。その変化には言語の外的要因によるもの (external factor) と内的要因によるもの (internal factor) とがある。両者が相互に関連し合い、影響し合うことで変化を引き起こしている。言語は人間が使用し、その言語によって文化や社会が形成されているとも言える。言語変化が生じる背景には、各時代の人々が自らの言語に対して直接的あるいは間接的に何らかの働きかけをしてきたことも事実である。

言語の質の高度化と当該言語の母語話者の読み書きの能力 (literacy) や知識との間には密接な関係があるものと考えられる。話し言葉のみで書き言葉が存在しない言語圏で高度な文化を育んだものがないということは歴史が証明しているところである。話し言葉のみでは情報や知識の蓄積ができないことに起因する。その点からすれば、英語を根幹に置き、それを手段とする言語文化圏においては、英語の精度が高まることでそれに相応しい、そのことが反映される高度な文化が期待できるのである。

英語史上、誰が、どのような働きかけや試みをしたのか、それが現代英語にどのように影響を及ぼし、また反映されているのか、それらの点について主に古英語 (Old English) から初期近代英語 (Early Modern English) において特に顕著な例を取り上げて本論では考察することにする。

1. 古英語

1.1. 英語母語話者の大ブリテン島到来

現代英語が英語という個別言語として発達しておよそ1500年が経過した。英語は西ゲルマン語の一派に属する言語で、当時、ドイツ北部に住んでいたアングル族 (Angles)、サクソン族 (Saxons)、ジュート族 (Jutes) の3部族によって大ブリテン島 (Great Britain) にもたらされた。約400年間大ブリテン島に駐屯していたローマ軍が、5世紀初め (410年) に本国へ撤退した後、現在のイングランド (England) の土地にはケルト系民族のブリトン人 (Briton) が住んでいたが、統治の状態は極めて不安定で、好戦的なピクト族 (Picts) とスコット族 (Scots) の侵略に苦戦していた。そのような時に、ブリトン人の王ヴォーティガン (Vortigern) は大陸に住むアングル族、サクソン族、ジュート族に救援を求めた。それに応えて Hengist と Horsa の兄弟が軍を率いてケント (Kent) に上陸したのが449年であると *The Anglo-Saxon Chronicle* に書き残されている。この時が英語としての歴史の始まりである。3部族はヴォーティガンの要望通りに勝利を収めた。当初、勝利した後、それ相応の金品を受け取って故国へ帰ることになっていたが、依頼主であるブリトン人と戦って勝利し、故国へ戻ることをせずブリトン人の土地を逆に乗っ取り居座ってしまった。敗れたブリトン人は辺境の地ウェールズやアイルランド等に追いやられた。もしもゲルマンの3部族が当初の約束通りに故国へ戻っていたならば、現在の英語と呼ばれる言語は存在しなかつ

たであろう。

1.2. キリスト教伝来

キリスト教の伝来により Anglo-Saxon England の文化は当時のヨーロッパにおいて最も高度な文化を育てていた。563年にケルト系キリスト教が大ブリテン島に最初のキリスト教として伝来した。聖コロンバ (St. Columba; 521-597) がアイルランドからアイオナ島 (Iona) を経てスコットランドにもたらしたもので、北方ルートと呼ばれる。他方、もう一つの南方ルートは、ローマ教皇グレゴリウス1世 (Pope Gregory I) の命を受けて聖アウグスティヌス (St. Augustine; ? - 604/5) が約40人の修道士と共に596年にブリテン島南東部のケントに Anglo-Saxon 人へのキリスト教布教のために派遣された。聖アウグスティヌスは“*Apostle of the English*”と呼ばれるように、初代カンタベリー (Canterbury) 大司教 (601-604/5) としてイングランドでの布教活動を行うと同時に、キリスト教の教義を通じて文化の向上に努めた。Anglo-Saxon England において、政治ないし文化の中心地として繁栄したのは、初期の頃には正にキリスト教の布教活動が盛んであったケントにおいてであった。その後、文化の中心が7世紀には Northumbria、8世紀には Mercia、9世紀以降は West Saxon の各方言地域となり、7世紀以降、北方から徐々に南下した。従来はゲルマンの北歐古代宗教を信仰していた人々が、キリスト教の伝道によって啓蒙され、文化度が急激に高まったものと考えられる。このキリスト教が大ブリテン島に伝来し定着したことが、その後の英国の歴史及び英語の歴史にさまざまな出来事をもたらすことになった。英語史の観点から見るとキリスト教は英語の質を高め、英国人の教養を高め、英国人を一体化するために大きな貢献をした。

1.3. ビード

ビード (Bede; 673?-735 —the Venerable Bede と呼ばれる。修道士・歴史家・神学者) が活躍した当時の北部イングランド (Northumbria 方言地域) は、高度な文化を生んでいた。ビードは、初期英国史の基礎資料を提供する *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* (The Ecclesiastical History of the English People; 731) を著した。ビードがこの歴史書をラテン語で著した背景には、彼が修道士であってラテン語に長けていたこともあるが、ラテン語を自由に駆使する読者を想定していたこと、またその時点での英語が、特に散文体で精度の高い表現をするのに相応しい水準にまで達していなかったということが考えられる。¹⁾

1.4. アルフレッド大王とヴァイキング

8世紀末 (記録によれば787年) から11世紀中頃にかけて、ヴァイキング (Viking) と呼ばれているデイン人 (Danes) とノルウェイ人の一団がブリテン島に来襲し、略奪行為をはじめた。793年にイングランドの北東部の海岸沿いに位置する Lindisfarne を皮切りに Jarrow、Iona などの修道院をはじめ Northumbria の各地を襲撃した。特に無防備に近い修道院は来襲

者にとっては比較的に襲撃しやすい豊かな施設でもあった。当時の文化及び学問の中心にあった修道院には、高価な書物が保管されていたが、彼らの手によってそれらの大部分が破壊されてしまった。もしそのような行為が為されなかったならば、古英語のNorthumbria方言やMercia方言で書かれた貴重な資料が現在まで伝えられていたはずであり、当時の言語について一層詳しく知ることができたはずである。初期の頃にヴァイキングは略奪というその目的を果たした後に冬を越すことなく故郷へ戻っていたが、9世紀中頃からは大ブリテン島に定住するようになった。彼らの母語は北ゲルマン語 (North Germanic) の一派である古ノルド語 (Old Norse) であって、英語は西ゲルマン語 (West Germanic) に属する言語であるため、この2言語には類似する点が多い。

古ノルド語から多くの日常語が借用された。動詞のare²⁾、call、die、give、lift、takeなど、人称代名詞のthey、their、them³⁾、前置詞のtill、名詞のsister⁴⁾、egg、garden、root、skin、sky、形容詞のawkward、flat、ill、low、weakなどがその例となる。

この2言語には語彙的には共通要素があるものの、文法的な相違点から見ると語同士の関係を表す文構造的な意味を司る屈折語尾 (inflectional endings) に相違があって、それが文法的な混乱をきたす結果となった。そのことが総合的言語の特徴を示す古英語から中英語 (Middle English) 以降に分析的言語⁵⁾へと変化することを余儀なくさせた一因となる。それを加速度的に助長させる出来事として、11世紀にスウェイン (Sweyn; ?-1014 (在位: 1013)) とその子クヌート (Canute/Cnut; 994? -1035 (在位: 1016-1035)) がイングランド、デンマーク、ノルウェーの3国の王となったことが挙げられる。イングランドがデイン王朝の傘下に入ったことは、古ノルド語の影響が英語に強く及んでいたことを意味する。

ヴァイキングのイングランドへの略奪と定住により、攻めるものと攻められるものとの力関係が発生し、攻める側のデイン人が優勢であった。9世紀に、ウェセックス (Wessex) 王のアルフレッド大王 (Alfred the Great; 849 (871) -899 (在位: 871-899)) は、ヴァイキングの侵略から国土 (特にイングランド南部) を救うために、ロンドンの北からヨークに掛けての地域にデイン法 (Danelaw) を敷き、デイン人の居住地域を定めた。それによって当時イングランドで最も栄えていたウェセックス (West Saxon方言地域) を彼らとの闘争と混乱から回避させた。アルフレッド大王はイングランドの教育と文化の荒廃を嘆いて、Pope Gregory 著 *Pastoral Care* (Cura Pastoralis) の古英語訳の序文に以下のように記述している。

Swæ clæne hio wæs oðfeallenu ón Angelcynne ðæt swiðe feawa wæron behionan Humbre ðe hiora ðeninga cuðen understondan ón Englisc, oððe furðum án ærendgewrit óf Lædene ón Englisc areccean ; & ic wene ðæt[te] noht monige begiondan Humbre næren. Swæ feawa hiora wæron ðæt ic furðum anne ánlepne ne mæg geðencean besuðan Temese ða ða ic to rice feng. (Hatton MS.: Hatton 20 in the Bodleian)

(So general was its decay in England that there were very few on this side of the Humber

who could understand their rituals in English, or translate a letter from Latin into English; and I believe that there were not many beyond the Humber. There were so few of them that I cannot remember a single one south of the Thames when I came to the throne.) (Sweet 1978, p.3)

アルフレッド大王は、学問の復興を期してウェールズのアッサー (Asser) をはじめ高僧たちを招聘すると共に、その当時ヨーロッパにおいて名だたるラテン語で書かれた文献の翻訳を奨励し、王自らも英訳を行ったことが知られている。現存する古英語訳の *Pastoral Care* はアルフレッド大王自らが翻訳し、Boethius 著 *Consolation of Philosophy* に関してはその一部の翻訳に携わったと言われている。また、ビード著 *The Ecclesiastical History of the English People* の古英語訳及び *The Anglo-Saxon Chronicle* の編纂作業を指示したのもアルフレッド大王であった (Myers & Hoffman 1985, p.28)。また、王自ら宮廷学校を設立し、貴族の子どもたちに教育を行った。もしも上記のようなアルフレッド大王による学問の奨励ないし書物の翻訳や編纂が行われなかったならば、現存する古英語の文献や資料は極めて数が少なく、しかも質の低いものが大半であったと考えられる。また、アルフレッド大王が行った行為は Anglo-Saxon 期のルネッサンス (Renaissance) であったとも言えよう。もしアルフレッド大王が学問の復興に乗り出さなかったならば、現に11世紀頃にアルフリック (Ælfric; c.995-c.1020) が学問の荒廃を嘆いているのだが、荒廃よりも以前に Wessex の質の高い文化形成そのものが存在しなかったはずである。

1.5. アルフリック

現在の Oxfordshire に位置する Eynsham の大修道院長であったアルフリックは古英語時代の最も優れた散文作家であったと見なされる。彼は *Catholic Homilies* や *Lives of Saints* などの優れた散文を残している。アルフリックは、11世紀において学問が荒廃し、文化が衰退している現状を打開しようと努めた。彼が古英語に訳した Genesis の序文において、かつての師においてもラテン語が満足に理解できない状態であったと記している。

Hwilon ic wiste þæt sum mæssepreost, se þe min magister wæs on þam timan, hæfde þa boc Genesis, & he cuðe be dæle Lyden understandan . . . (Crawford 1969, p.76)

(I once knew that a certain priest, who was my teacher at the time, had the book of Genesis, and he could understand Latin in part.)

アルフリックは、ラテン語能力の低い修道士がラテン語を学ぶ際の手助けをする目的で *Colloquy*、*Grammar*、*Glossary* という3部作とも言えるものを残している。*Colloquy* は、アルフリック自身が書いたものに、弟子であり写字生のアルフリック・バタ (Ælfric Bata) が増補したものと見なされている。これには、ラテン語の text に古英語で行間註解が施されているものが残されており、この古英語での註解は高い資料的価値があることは言うまでもないが、書かれている話題が当時の庶民の日常生活の様子を伝えていることから、貴重

な情報を伝えてくれている。*Colloquy*は対話形式で書かれており、ラテン語の話し方を会話風に学ばせるという画期的なものである。*Grammar*はラテン語の文法を古英語で書いたものであり、土地の言語で書かれたこのラテン語文法書は中世のヨーロッパで最初のもつと見なされる。アルフリックの残した著作と彼が行った教育事業は、荒廃状態にあった当時のイングランドの再生を図ったことに止まらず、キリスト教精神の伝承、英語史上に貴重な資料を残す大事業であった。

2. 中英語

2.1. 中英語の時代背景

言語は急速かつ急激に変化するというものではない。一般に古英語と中英語とを1100年を節点として区切りをつけているが、1099年と1101年の英語には大きな違いはない。英語史上での時代の区分は絶対的な線引きによるものではなく、むしろ帯状に時間的な幅が存在すると考えるべきである。ウィリアム征服王 (William the Conqueror) によるノルマン人の征服 (the Norman Conquest) が1066年に起きて、英国はその後約300年間に亘ってフランス語を母語とするノルマン人の支配を受けることになった。その間、英国は二重言語構造の国家となり、支配階級でフランス語 (厳密にはNorman French) が用いられ、被支配階級に属する一般のイングランド人の間では英語が用いられ続けた。ウィリアム征服王は英語を母語とする人々にフランス語の使用を強制する政策は一切取らなかった。それによって英語が途絶えることは免れた。イングランドの貴族を全廃させ、彼に忠誠を誓った兵士や臣下に地位と封土を分配し、至る所にノルマン人の司教を配置した。そのためイングランド人の貴族と聖職者はなくなり、城塞はノルマンディー (Normandy) からきた部隊に守らせるという徹底ぶりであった。あらゆる職業人が大陸から呼び寄せられ、イングランドの住民は最低の身分に追い込まれた (Mossé 1970, p.58)。

初期中英語期においては、二つの身分の層が形成されていて、ノルマン人はほとんど英語に関心を示すことはなかった。だが*The Chronicle*の著者Robert of Gloucester (c.1260-c.1300) が1298年に「フランス語を知らなければ、ほとんど尊敬されない」(Mossé 1970, p.59) と断言していることから、下層のイングランド人が指導者たちの言葉を解することが彼らにとって有利な状況を生んでいたことを伺い知ることができる。一方、Mosséは、「12世紀には貴族たると中産階級たるとを問わず、民衆の言語を理解し、話すこともできるノルマン人のあることを認めてさしつかえないようである。そのかわりまた、イギリス人の聖職者がフランス語を知らなかったとは考えられない。」(Mossé 1970, p.59) と記している。このように2言語が交差し合うような状況が存在したとはいえども、誰もが英語とフランス語を不自由なく駆使できるような環境にはなかった。結婚、教育、職業など、当時、ある限られた社会条件下にあった人々のみが2言語を使用することができたものと考ええる。

イングランドにおいてフランス語が優位に立っていた状況も1204年には一転した。この

年にジョン王 (John; 1167-1216) がノルマンディーの領地を失うという事件が起こり、この頃から貴族たちはイングランドないしノルマンディーのいずれか一つの土地を選ぶことを余儀なくされ、フランスとの関係が遠のきはじめた。その後、14世紀中頃に勃発した百年戦争 (the Hundred Years' War; 1337-1453) での敗北によりイングランドはフランス内の領地の殆どを喪失したこと、14世紀中頃に流行った黒死病 (Black Death) によりイングランドの人口のおよそ3分の1にも相当する下層階級の (ほとんどが英語を母語とした) 人々が死んだ。それに伴って労働者階級の人口が急速に減少したため、フランス語を母語とする大地主たちは、自らの土地に労働力を確保するために、それまで目もくれなかった英語を進んで使用するようになった。この時点で上下二階層を隔てていた階層の壁が堰を切ったように崩れ、英語の中にフランス語の語彙が急激に流入するに至った。一説によれば1400年までにおよそ10,000語がフランス語から借用されたという (Bambas 1983, p.70)。英語復活の機運が急速に高まり、1348年には、学校の授業に英語が使われはじめ、1362年には、議会の議長が英語で開会宣言を行うなど、国を司る法廷や宮殿など国家の中枢機関において英語が使われはじめた。その意味でも14世紀は英語復活のための重要な時期と位置づけられる。その後、英語がますます力を得て、15世紀の標準語の成立に向けて歩みを進めることになった。

1430年頃になるとフランス語やラテン語に見切りをつけて、イングランドの国家中枢機関が英語で公文書を発行しはじめた。そこで用いられた英語が一般に大法官府 (chancery) 英語と呼ばれるもので、そこで用いられた綴りが短期間に全国の写本業者に行き渡り、それが正書法に大きな影響を与えた (Kisbye 1992, p.61)。話し言葉ではなく、書き言葉が標準語と見なされる安定的な言語形態であった。当時は文字を通じて広く行き渡り、知れ渡っているある特定の言語形式をもって標準語と見なしていた。それ以前には地域ごとに特有の言語形式 (= 方言) が纏まりなく分散するような言語分布になっていた。それがロンドンの地域を中心に標準語へと発展した。その標準英語は、ロンドンという一地域方言 (regional dialect) としての特徴と大法官府で用いられた一階級方言 (class dialect) の特徴を併せ持っている。

2.2. オルム

初期中英語期の12世紀 (?c.1200) に修道士オルム (OrmまたはOrmin) がおよそ19,000行に及ぶ聖書の注釈書 *Ormulum* (または *Ormulum*) を著した。この書は East Midland 方言地域で書かれており、発音に基づいた独自の正書法が用いられていることから、当時の発音を知る上で数少ない貴重な資料を提供してくれている。この試みは現代英語の綴りにも通じるところがある。例えば、littleに見られるように、ある母音の直後に子音を重複 (VCC) させることでその母音が短母音であることを表す (VCC)。そのような綴りが工夫して用いられている。次の例文はこの書を“*Ormulum*”という書名にした由来と著者がOrmであることを記している箇所を引用したものである。1行目には、Biss “this”、iss “is”、nemmnedd

“named”、Ormulum “Ormulum”などにその綴りの特徴が表れている。

Biss boc iss nemnneð Ormulum *This book is named Ormulum*

Forþi þatt Orrm itt wrohhte, *because Orm wrote it* (Holt 1974, Pref. 1-2)

*Ormulum*は綴りの工夫のみならず、15世紀頃に標準英語へと発展するための基礎となったEast Midland方言のおよそ200年前の姿を伝えているという点でも価値のある作品である。

2.3. ウィクリフ

キリスト教が政治、文化、国民生活に大きな役割を果たしてきた。16世紀のヨーロッパにおいて、ローマ・カトリックの教皇位の世俗化、聖職者の墮落などに対する信徒たちの不満が結集して、ローマ・カトリック教会から分離してプロテスタント教会を設立するに至った宗教改革 (the Reformation) と呼ばれる大きな革新運動が起こった。「人は信仰によってのみ救われ、聖書のみが神の国を示す」との考えのもとで、聖書に戻るという思想が広まった。それよりも100年ほど前の14世紀後半に、Oxford大学教授で聖職者のジョン・ウィクリフ (John Wycliffe; c.1320-1384) が、当時権力を握っていたローマ・カトリックを真っ向から批判し、改革に向けての行動に出るという、宗教改革の前触れともいえる行動を起こした。

ウィクリフは一国にあつてその国の言語で書かれた聖書がないことを訴え、自ら聖書の英語翻訳の作業に取り組んだ。当時、ローマ・カトリック教会の公認聖書であったラテン語訳聖書Vulgateから中英語への翻訳は一門の協力を得て完成した。初期の版は1382年に完成し、その後、ウィクリフの助手のジョン・パーヴェイ (John Purvey; 1354?-?1421) らがWycliffe Bibleの新版を1388年と1395年に完成させた。これらの聖書は、手書き写本時代であったために写本の数が少なかったこと、その上教会の弾圧を受けたこともあって、広く流布するには至らなかった。寺田 (2003, p.111) は、「Wycliffeが聖書英訳の事業を企てたのは、ラテン語の知識に乏しい若い聖職者のためにだけでなく、一般民衆の手に届くところに聖書をもたらしたいという信仰上の理由があった。それゆえに当然予想できることは、できるだけ民衆の英語で、つまりは当時の口語英語で聖書を翻訳 (下線は筆者) したいという願いのもとでこの事業が企てられたのではないかと想像できる」と記している。いずれにしてもこの時期において、明瞭で力強い英語による聖書が翻訳されたことは、その英語を介して当時の英語に影響が及ばなかったはずがない。この偉業は、1521年にマーティン・ルター (Martin Luther; 1483-1546) が完成させた新約聖書のドイツ語訳が広く読まれて、そのドイツ語がその後のドイツ語の発達に大きな影響を与えたことと関連させて考えられる。

2.4. チョーサー

チョーサー (Geoffrey Chaucer; c.1340-1400) は、外交官としてフランスとイタリアを訪れた。そのことが、未完成の作品とはいえ17,000行を超える代表作の*The Canterbury Tales*

にも反映されていると考えられる。中英語期に書かれた作品の大半が白黒映画のようなイメージを与えるものであったのに対して、チョーサーの作品は洗練された総天然色映画の印象を与える作風である。英文学史上での2人の偉大な作家であるチョーサーとシェイクスピア (William Shakespeare; 1564-1616) の作品が人気を博してきた理由には、ある共通点がある。それはチョーサーがヨーロッパでルネッサンス (Renaissance) に接し、シェイクスピアがその約200年後にイングランドへ伝来したルネッサンスの影響を受けたということである。

またチョーサーは、新語を創造して用いた。チョーサーの作品が初出となる語として、動詞に“-tion”ないし“-(s)ion”の接尾辞を添加して造語した名詞がある。consideration (<c.1386 CT, “Parson’s Tale”), duration (<c.1384 *Hous of Fame*), examination (<c.1386 *Melibeus*), habitation (<c.1374 tr. *Boethius De Consol. Philos.*), progression (<c.1385 CT, “Knight’s Tale”) がその例として挙げられる。

2.5. カクストン

ウィリアム・カクストン (William Caxton; c.1422-c.1491) は、Cologneを訪れた際、Johannes Gutenberg (c.1398-1468) がドイツで1445年頃に発明した活版印刷術が大事業にまで発展している様子を目の当たりにした。当時住んでいたBrugesへ戻るやいなや活版印刷所を開業して、1473年にRaoul Lefevreの*Recuyell of the Historyes of Troye* (Recueil des Histoires de Troye) を自ら翻訳して出版した。その後、イングランドに戻り1476年にWestminster寺院の敷地内に活版印刷所を開設し、書き言葉の定着、教育や文化の向上に多大なる貢献をした。最初の印刷本はGeoffrey Chaucerの*The Canterbury Tales*であった。カクストンは、印刷業者であると同時に、自らも外国語からの英語訳を多数手掛けた翻訳家でもあった。大半はそれ以前の英語の手書き作品を印刷し出版したものであるが、多くの人々には読めない外国語で書かれた書物を母語に翻訳したことで、多くの人々がそれを読むことができるようになった。カクストンと同時代人にもう一人リチャード・ピンソン (Richard Pynson; 1448-1529) がいた。彼も印刷を手がけ、現代の印刷物にも多用されているローマン体活字 (Roman type) を最初に印刷に導入した人物であり、500にも上る本の出版を通じて、標準英語の確立と普及に寄与した。印刷本はそれまでの高価な羊皮紙に比べておよそ10分の1の費用で済んだ。書物が大衆化して文字が身近な存在になり、それに伴って識字率が高まり、教育水準の向上にもつながった。1500年と1640年の間に、はやくも英国では20,000種以上の異なった作品が印刷された (Mossé 1970, p.118)。

カクストンの時代は、ロンドン方言を基礎として標準英語の成立に向けて英語が目まぐるしく変動する時期であった。現在のようなマスメディアがなかった時代であって、標準英語としての一方言を広く国内に普及させ、定着させるためには書き言葉の果たす役割が大きかった。その意味でもカクストンによって言語の伝達と記録を行うための新たな技術が導入されて、手書き写本から印刷に移行されたことは画期的な出来事である。同じ印刷

物を一度に多数生産することが可能になり、綴り字の統一、語形変化の一定化、表現形式の固定化と文法形式の安定化、語彙の増加など、標準語の成立及び英語の強化に大きく貢献した。また、読者数を増やし、読者層を厚くすることで、基本的な言語構造ないし言語要素を定着させるという点で重要な機能を果たした。

手書き写本の時代には、方言ごとに固有の綴り、語形変化、文法形式が採用されていた。視点を変えて見れば、その頃の写本では、書き言葉と話し言葉との区別が明確にされていなかったと言える。手書き写本の時代には、同じ写本の中で同じ語が何種類もの異なる綴りで書き表されていることが多かった。また、印刷本になっても印刷業者が固有の綴りや表現形式を採用することがあった。カクストンがghostに発音されない<h>を挿入し、それが定着したのもその一例である。この語の古英語語形はgāstないしgæst (< Germanic *gaisto-z) で、中英語には gast (e)、gost (e)、goost (e) などの語形が用いられており、そこには<h>は含まれていなかった。OEDによれば、カクストンがその<h>を挿入したのはフラマン語 (Flemish) のgheestからの影響によるものと見なされている。

3. 初期近代英語

3.1. 中英語から初期近代英語へ

Myers & Hoffman (1985, p.113) が以下のように記しているが、英語は1500年を境にそれ以前とは大きく様変わりした。1500年が中英語と近代英語とを区切る節目となっている。

Most modern students simply cannot read the language of 1450 without either special training or considerable editorial assistance, but before 1550 they can find a good deal of material that they can handle without difficulty.

言語に変化がもたらされるには、さまざまな原因が考えられる。中英語から近代英語に移るこの時期には、大母音推移と呼ばれる言語内に生じた母音変化が大きく影響するが、言語外においても活版印刷術の発明、標準英語を確立させるための様々な活動、そしてイングランドの国力が強まり、海外へ進出するという大きな動きが生じた時期と重なる。

3.2. ルネッサンス

14世紀にイタリアで始まったルネッサンスが、イングランドにはおよそ2世紀後の1500年の少し前に伝来した (Gelderen 2014, p.159)。1500年から1650年の期間はしばしば English Renaissance と称されている。国力を増してきたイングランドの近代化を早め、文化の高揚をもたらした。ルネッサンスの伝来は、ギリシャ・ローマの古典文化の復興に止まらず、教会の規律に縛られないでそこから解放されて古代ギリシャ人やローマ人のように自由な人間らしい生き方や考えを抱かせる機会ともなった。人々は古典から必死にその精神を読み解こうとした。しかしラテン語を読み理解するにあたって、当時の英語は語彙的に貧弱であった。知識欲の旺盛な人々は、その言語の壁に突き当たり、英語の語彙の貧弱さについて実感せざるを得なかった。

15世紀のイングランドでは、女性を含む多くの中産階級の人々は、少なくとも英語の読み書きを学ぶまでに教育の普及が進んでいた。印刷技術の進歩によって大量の書物が市場に出回り、庶民の間で本と文字とが身近な存在になるまでに普及した。シェイクスピアの時代までに、ロンドンの人口の3分の1ないし2分の1の人々が読むことができたものと考えられる (Myers & Hoffman 1985, p.120)。シェイクスピアの文才により、多くの人々がその作品の虜になった。聖書と並んで彼の作品から多くの名句やことわざが生まれた。シェイクスピアは新語を創造するなど、英語の語彙を豊富にした。シェイクスピアが作品創作を通して英語を豊かな言語とし、英語の質を向上させるために大きな役割を果たした一人であることには間違いない。

初期近代英語期に英語が採った増語の方法についてここで触れておきたい。ルネッサンスがイングランドに伝来された頃の様相は、丁度幕末から明治維新にかけて日本に西欧の文化や書物が急速に流入したその時期と類似しているように思われる。その頃、オランダ語や英語などの西欧語の語彙に対応する日本語の語彙が極めて貧弱であった。そこでその内容を咀嚼したり、翻訳したりするために、新しい語句を創造しなければならなかった。

その時点で日本人は翻訳借用という方法を採用した。つまり economy を「エ・コ・ノ・ミ・ー」として手を加えずにそのまま左から右に借用したのではなく、「経済」という語をそれに充てた。また『書経』において「学問や教養があり立派なこと」の意味を表した「文明」を civilization の訳語に当てた。そのようにして当時の日本人が馴染みやすく、理解しやすいことばを用いて新しい概念を取り入れて定着させたのである。それに対して英語では、ラテン語やギリシャ語から英語に翻訳する際、原語のラテン語やギリシャ語から直接語彙を借用する方法を選んだ。そのほとんどが抽象語や学術語であった。catastrophe、encyclopaedia、exact、explain、exaggerate、formula、peninsulaなどがその例として挙げられる。原語から直接借用するというをした背景には、英語とラテン語やギリシャ語がインド・ヨーロッパ語族 (Indo-European languages) という同一の語族に属する言語であることが影響している。日本語にとっての英語やオランダ語は全く異質の言語であるため、遙か昔に借用した漢語や漢字を用いる方が違和感なく吸収されたのである。この様に語彙の取り入れ方の点で、当時のイングランドと日本との間には大きな違いが確認できる。

3.3. ティンダルと欽定訳聖書

金字塔とも目される欽定訳聖書 (the Authorized Version of the Bible, the King James Version) は、イングランド王のジェームズ1世 (James I; 1566-1625) の命により当時の優れた学者や宗教家53人が選ばれて、約3年半を費やして完成し、1611年に出版された。一般に欽定訳聖書は、白紙の状態では英訳に取りかかったものと考えられがちであるが、実はそうではない。この聖書は、ウィリアム・ティンダル (William Tyndale; 1494?-1536) による英訳聖書 (1525-30) に大きな影響を受けており、その英語訳の80%~90%がTyndale訳聖書から取り入れていると言われる。そのほかにもマシュー訳 (Thomas Matthew; 1537) やカ

バーデル訳聖書 (Miles Caverdale; 1535) なども参考にされた。とは言え、欽定訳聖書の英語がその後の英語散文の手本ともなるような洗練された文体を備えており、表現が簡潔で力強いという特徴があることには間違いない。また後続の聖書翻訳に大きな影響を与えていることも事実である。その英語には古めかしさは感じられるものの、400年近く経った今でも愛読されている。欽定訳聖書を通してその基礎を作ったTyndaleの偉業とその後の英語に与えた影響と貢献について改めて目を向けるべきであろう。

3.4. 初期近代英語期の対外進出

英語は世界の共通語として広く用いられているが、その基盤はエリザベス1世 (Elizabeth I; 1533-1603) の時代に遡る。その頃から英国は海外進出が盛んになった。その頃までに羅針盤が改良され、精度が高まったこと、造船技術が向上し、航海術が著しく発達したことなどが結実して大航海時代が始まった。人の居る所に言語ありである。人々が英語を携えて航海し、世界に広く拡散させた。その結果、世界の至る所に英語の基地が建設された。

1588年にスペインの無敵艦隊を撃沈し、1600年に東インド会社を設立するなどを足がかりに、その動きが本格化した。それに伴って各大陸に植民地を作り、それが後の大英帝国へと発展する。植民地においては、支配者と被支配者との間で格差が生じ、もとより被支配者は現地語を用いていたが、支配者の言語に併合されて行くのが一般的である。こうして英語が各地に影響を与え、普及していった。大航海時代と呼ばれる15世紀から16世紀にかけて、西ヨーロッパ諸国が対外進出に乗り出した。彼らの間に肉食が普及し、肉の保存や調味料としてのコショウなどの香辛料の需要が増した。世界に乗り出すことで、それまでに接したことがなかったような動植物が身近なものとなって、その名前の多くが英語に借用された。

東インド会社を通じて、英国はインド経営を推し進めた。ここに英語とインドとのその後の密接な関係が成立した。一方、スチュアート朝時代の1607年に、北アメリカの東岸にヴァージニア植民地を建設した。ピルグリム・ファーザーズと呼ばれるピューリタンの一団が、新大陸に渡り1620年にブリマス植民地を建設し、その後、ジェームズ1世の圧迫を逃れて信仰の自由を求め、新天地を求めてピューリタンが続々と北アメリカに渡り、1776年の独立に向けての基礎を作り、やがて辞書、教科書、文法書を整えて、米語という新しい種類の英語を創り出すことになった。

4. おわりに

古英語の時代から初期近代英語に至るまでの約1200年間について、英語に変化を引き起こしたと考えられる特徴的な出来事を取り上げてみた。英語に限らずいかなる言語もそれ自らが能動的に変化を引き起こすことはあり得ない。言語は、それを使用する人々のあり方を鏡のように反映するという特徴がある。人々の生活空間にある種の変化が生じ、それに伴い彼らの生活様式が以前とは異なったものになると、そこで用いられる言語においても

変化が生じることが種々の事例によって明らかにされる。人によってもたらされる政治的ないし経済的な変化、戦争や侵略行為、科学や技術の進歩、教育の向上など、身近に起こる様々な出来事が程度の差こそあれ言語に変化をもたらす要因になっている。

後注

- 1) 翻訳書を除いて現存する古英語の文献の大半が韻文で書かれていることからそのことが言えよう。
- 2) 古英語の直説法2人称単数現在の語形は eart “are”であった。
- 3) 古英語の人称代名詞の語形は hīe “they”、hiera “their”、him “them”であった。
- 4) 現代英語の sister は古ノルド語の語形に由来するもので、古英語では sweoster であった。
- 5) 程度の差こそあれ、後期古英語の文献において既に分析的な言語特徴の兆しが見られる。

主要参考文献

- Bambas, Rudolph C. 1983. *The Origin and History of the English Language*. Edited with notes by Eiichi Suzuki and Shuji Sato. Tokyo: Kinseido.
- Crawford, S. J., ed. 1969, 1922. *The Old English Version on the Heptateuch Ælfric's Treatise on the Old and New Testament and his Preface to Genesis*. With the text of two additional manuscripts transcribed by N. R. Ker. EETS O.S. 160. London: Oxford University Press.
- Gelderen, Elly van. 2014. *A History of the English Language*. Revised ed. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Holt, Robert, ed. 1974. *The Ormulum*. With the notes and glossary of Dr. R. M. White. 2 vols. New York: AMS Press. Originally Publishd by Clarendon Press, 1878.
- Kisbye, Torben. 1992. *A Short History of the English Language*. Edited by Knud Sørensen. Aarhus C.: Aarhus University Press.
- Mossé, Fernand (著)、郡司利男・岡田尚 (訳) . 1970. 『英語史概説』東京：開文社出版。
- Myers, L. M. and R. L. Hoffman. 1985. *The Roots of Modern English*. Edited with notes by Haruo Iwasaki. Tokyo: Kinseido.
- Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner. 2015. *Oxford English Dictionary Online*. Second edition. Oxford: Oxford University Press.
- Sweet, Henry, ed. 1978. *King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care*. Part I. EETS O. S. 45. New York: Kraus Reprint.
- 寺田正義. 2003. 「ウィクリフ派新約聖書における Can, May, 及び must について」『聖学院大学論叢』15 (2) , 109-123.
- <http://brandonhawk.net/2014/07/30/aelfrics-preface-to-genesis-a-translation/>